

古賀志地区の心のふるさと 孝子桜のいま・むかし

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

宇都宮市立城山西小学校の校庭にある「孝子桜」が今年も見事に花開いた。四月四、五日の両日には満開のもと「孝子桜まつり実行委員会」主催による「孝子桜まつり」が開催された。たった一本のシタレザクラではあるが、何千人もの見物客を集め、見る人の心を打つ。孝子桜はそんな偉大な桜である。

昭和五十年代、古賀志地域を経て宇都宮市中心部を結ぶバス路線が廃止となった。加えて城山西小学校のため城山西小学校では、小規模特認校の指定を受け児童数の確保に乗り出し、一方、地域住民も、地域活性化に取り組んだ。その地域活性化の最大の目玉として、地域のシンボルである孝子桜の花咲く時期に祭りを開催しようとなった次第である。

孝子桜は、昭和三十四年に宇都

宮市の天然記念物に指定された。指定の正式名称は、「城山のシタレザクラ」であり、指定時の推定樹齢は四百年といわれた。シタレザクラは、ヒガンザクラの園芸種であり、したがって人為的に植栽されたものである。城山西小学校の地には、明治初期まで花藏院という寺があった。孝子桜は、この花藏院に植栽されていたものである。花藏院は、地元民の信仰の

より所であり、孝子桜は、地元民の心を癒すために植えられたのである。明治初年、神仏分離、廃仏運動の波に押され花藏院は廃寺となったが、花藏院跡はその後も地元民の集う所となった。明治六年、現在の城山西小学校の前身「学貫舎」が開設された。そして孝子桜もそのまま残され、その後は子どもたちの心を癒す役目となったのである。

孝子桜が有名になったのは、樹齢の古さ、花の見事さもさることながら、この桜にまつわる民話の存在も

見逃せない。話の粗筋は次の通りである。「冬にもかかわらず病気の父親が桜の花を見たいという。親孝行の息子は、大日様に父親の願いを叶えて欲しいと祈願した。そうしたところ見事に桜が咲き、それを見た父親は満足し息を引き取った」

このようにシタレザクラには親孝行の息子の話があるので、通称「孝子桜」と呼ばれたのである。

この民話が活字化されたのは昭和五十八年宇都宮市教育委員会が出した「宇都宮の民話」が最初である。当時の文化財調査委員で城山地区担当の高山伝治氏が、古老から聞き取りをした話を物語化したものである。しかしこの段階ではまだ親孝行の息子の具体名はついていない。名付け親は昭和六十年当時城山西小学校教員であった小倉(現大貫)孝氏で、親孝行の息子であるということと自分の名前から「幸助」と名付けたという。そして幸助の名前が登場する孝子桜の話が活字化されたのは、平成十八年下野民話の会編による「下野の民話」の中で小板橋武氏が再話したのが最初である。これにより、現在知られる文学的な孝子桜の話ができあがったのである。

現在の孝子桜は、あちこちが痛み、治療の痕が生々しい。それでも春になると、満開の花を咲かせる。その姿はまるで老体に鞭打つかのようでもある。そのひたむきに咲く姿が、見物人の心を魅了するのでもある。



旧花藏院跡にある孝子桜
(地田正夫氏提供)



今年も満開の孝子桜